Truiamph onedollar　～勝利への放浪者～

リューヤ

第二回戦で観客全員を熱狂させ、辛くも勝利を手にしジンの中での評価も高くなったアゲートはあれからすぐに医務室に緊急搬送された結果・・・肋骨３本にヒビが入り上腕筋肉離れの内臓損傷に打ち身に捻挫に打撲の内出血等々、全治一か月の重傷と診断されて現在はベッドの上で安静にしていた。さらにアゲートと戦ったあの男はこれを上回る瀕死の重傷で医務室搬入後すぐに手術を受け、全治半年とされた。命を取り留められただけで奇跡に近い二人であった。治療の現場に同席していたドクターはこれを聞き、二人を「ゴキブリすら上回る生命力」と称賛（？）した。

この後の試合は二回戦の時同様、ジンと虎眼の二人だけで進めることができる。アゲートが欠けて戦力が落ちると安心しきっている相手を容赦なく叩き潰す様は悪魔的な凶悪さすら醸し出され、むしろアゲートがいた時よりも攻撃の手が鋭くなり、それから先の試合は熱狂的とは言えないが全て１分以内の瞬殺でカタが付いた。
戦った相手は例外無しにすべて武器を破壊され、一人残らず病院に送られる羽目になってしまった。
一部の観客は「あの二人は人間じゃない」とも噂している。

そんなこんなでこの化け物二人にかかればあっという間に最後の決勝戦へ踊りつめるのであった。
控室で待機しているときに相手の前情報を聞くと、相手は前回、そして前々回の優勝経験者で・・・使用している武器ももちろんグングニエル製のものだった。チーム名は「ハンティング・ナイブズ」、直訳で「刀狩」とはジンに正面から喧嘩を売ったような名前で少し気に入らなかった。
メンバーは５人、試合に合わせてメンバーを選出しているようだ。共通していることは全員剣、または刀を自分の武器にしていることくらい。
同じ剣客として立ち会う場合その勝敗はお互いの技量の差で決まるものだが、果たして仮にも優勝経験者にどこまで通用するかがジンの課題だ。
虎眼は・・・・特に問題は無さそうだ。今も落ち着いた様子でストレッチ兼イメージトレーニングの真っ最中だった。ただあの手の運び方はどうも頭を掴んで時計回しに１８０度以上回しているように見えるのはきっと気のせいだろう。

「・・・決勝かぁ」

「不安か・・・？」
「冗談、たった半日オレ達が頑張っただけであのクソの看板が崩れると思うと・・・笑けてくるような気がしてな」
「前にも言ったかもしれないが、油断だけは絶対にするな。常に気を引き締めてかかれ」
「それはアゲートにでも言ってやれ」

ジンはのんきな態度のままタバコの煙を吹き出すと、吸い殻を床に捨てて火を踏み消した。一応この控室は全室禁煙のはずだったのだが、ジンのがまんが限界を超えて控室に戻る度にこうやって隠れて一服を楽しんでいる。主催者側に見つかったら怒られるだろうと分かっているが、ジンの喫煙欲はもう止まらない。関係者抱き込んででもモクに走るに決まっている。これに関して虎眼も呆れ果ててしまい、すでに「我関せず」を決め込んでいた。

コンコンコン・・・

扉の向こうで誰かがドアを叩いてきた、どうやら呼び出しが来たみたいだ。
途端二人の目の色が変わった。剣を腰に差し、拳をぶつけてお互いに気合は十分に溜まったようだ。新しいタバコも咥えながら扉を開き、二人は落ち着いた足取りでリングまで続くまっすぐの廊下を歩いた。
ようやくこれで終わる・・・やることはこれから戦う連中を今までの奴らと同じように捻り潰し、手に持っている獲物を粉々に破壊してやる・・・たったこれだけの作業だ、腕が鳴るってものだ。
煙を吐き捨てると目の前の入り口から観客の騒ぐ声がキンキンと聞こえてきた。

「・・・オッシ、やるか！」
「応っ！」
「オレっちも頑張るっさー！！」

・・・・・・・・・。
ちょっと待て。今なんか、聞いたことのある声が・・・・？二人は急に足を止めた。

「・・・どうかしたさジン、兄貴？」

振り返れば・・・・二人の後ろにはいつの間にか絶対安静を言い渡され現在医務室のベッドで寝ているはずのアゲートが平然と立っていた。頭や体にはまだ包帯が巻かれている。

「・・・・・・お前何やってんの？」
「え？」

「治療中じゃないのか？」
「いやさそれが～・・・」

アゲートの回想
治療を済ませたアゲートが再び意識を取り戻したのはほんの数十分前だった。ドクターに話を聞いたら自分はもう４時間以上もベッドの上で横になり、ジン達はもうすぐ決勝戦に臨むところだった。それを聞かされて居ても立ってもいられなくなったアゲートは病室を抜け出し、急いで祭りの会場に戻ろうとしたが、例によってドクターを始め数人の医者達の必死の抵抗で病室から出してもらえなかった。
そもそもアゲートの武器の斧はすでに破壊されているのですでに参加資格はないと説得しても、本人は聞く耳も持ってくれそうになかった。
そんな時に現れたのが、あの時アゲートと痛み分けになった「羅刹」の対戦相手だった。彼は全身包帯巻でストレッチャーの上で横になりながらアゲートの話を聞くと、急に立ち上がって走り出し、祭りの主催者側に直談判を試みたのだ。
（念のため加筆するが、彼は手術が終わって間もなくの状態である）
本人の戦闘意欲を弁解し、使い物にならなくなった斧の代わりにほとんど無傷の状態のまま放置されている自分の武器、あの拳骨ハンマーを代用させてアゲートを試合に出させてくれないかと必死になって説得してくれた。
（この時大声を上げる度に包帯の内側から赤い汁が噴き出した）
選手の熱意に圧倒された主催者側はこの申し出に応じ、特別にアゲートの復活を許可してくれた。ただし医師がアゲートの生命活動に致命的な支障を与えられたと判断したら即刻リタイアするという条件付きだった。
この後アゲート等は涙を流しながら固い握手を交わし、羅刹の男は傷口が派手に開き手術室にとんぼ返りとなったのは言うまでもない。

「っつう訳さ！」
「んなバカな・・・平気なのか？」
「余裕余裕！！こんな傷どうってことないさ」
「死んでも責任は取らないぞ？」
「モロチン！！自己責任でここに来たさ、どうせ死ぬんなら兄貴達と一緒の場所で死にたいさ！」

・・・・・アゲートの瞳はいつものように屈託のない、無邪気にさえ見える明るい火が燃えている。コイツの中ではすでにエンジンが火を噴いている状態のようだ。もうこ

うなったら止めるのも忍びない、ジンは半笑いしながら向き直った。

「まぁ戦力は多い方が無いよりマシだな・・・つう事にしておいてやるよ」
「フフフ・・・どうだかな？」
「へへへ・・・さぁ、改めて行くっさあ！！」

ワアアアアアアアアアアアア！！！！！

入り口をくぐった途端、スタジアム全体から割れんばかりの今日一番の歓声が響いた。リングの上にはもう対戦相手のメンバーが３人、すでに選抜を終えて立っていた。連中は遅れて参上してきたジン達を見下し、勝者の余裕なのか口元には小さな笑みが浮かんでいる。あくまでもジンがそう見えたがけなのだが、その表情を目視した途端やる気がもう一度燃え上ってきた。
吸い終わったタバコをその場に吐き捨てて新しいのを加え直し、３人も同じリングの上へ上がると、レフリーが中央に現れてマイクを握った。

「みなさんどうかご静粛に、これよりウェポン・フェスティバル最終ラウンド・・・決勝戦を始めようと思います！！」

ワアアアアアアアアアアアア！！！！！

「初出場ながらその鬼のような戦闘能力ですべての選手を瞬時に薙ぎ払った期待の大型ルーキーチーム「ＡＡＡＡ」と対しますのは、その華麗なる剣技であらゆる選手を葬り去った前回前々回の優勝チーム「ハンティング・ナイブズ」！！！」

もう今のジン達にとってレフリーの紹介なんて何の意味もない。目の前の相手を叩き潰してやりさえすればそれでいいのだから。
今回の相手の武器は全員変わった剣を持っている。右に居るマフラーを首に巻いた男は全体が軽く湾曲した細身の鞘に収まった見たことの無い剣を腰にぶら下げ、真ん中の細目の男は背中に身長の半分くらいの大きさを持つ大型のショーテルを２本担いでいる。そして最後の一番体の大きいタンクトップ男が圧巻だった、肩に担いでいるのは所有者の表面積よりも明らかに大きい出刃包丁のようなデザインのグレートソードだ。あれにかかればアゲートの拳骨ハンマーはともかく、まともに食らえば虎眼のガントレットはきっと腕ごと持って行かれるかもしれないし、ジンの剣に至っては包丁に爪楊枝で対抗するに等しい。
となるとだ、これは対戦相手が自然と絞られてくる。あのデカブツの相手はアゲートに、細目はジン、残ったマフラーは虎眼が片づければ大丈夫だろう。

「それでははじまります決勝戦！！レディィィィィィ・・・・」

いよいよ始まる、全員が気合を入れてそれぞれ武器に手をかけた。息を整え、集中力を少しずつ高めてゆく。

「ゴオオオオ！！！！！」

ゴングが鳴り、最後の勝負の幕が開けた途端・・・ジン達３人は一瞬奇妙な感覚に陥ってしまった。ただ感じたのではなく、脳が理解するより先に視覚的な違和感で包まれたのだ。数ｍ以上間隔を開けていたはずの対戦相手の姿が、今はほんの１ｍ以内の場所に立っているのだ。
３人とも目をギラギラと光らせながら、後ろにはあのマフラーが回りこみ、正面には細目が２本のショーテルを高く掲げ、真横にはあのデカブツが剣を薙ぎ払おうと構えている。
見失ったのはほんの一瞬、その一瞬の間にこの３人はお互いの間合いと詰め、ジン達以上の速さで攻撃に転じてきたのだ。
信じられないような現実に肝を冷やしたが、ようやく脳が筋肉へ向かって防御態勢を取るように指示が回りジンが正面のショーテルを受け止め、アゲートがデカブツの攻撃を防ぎ、虎眼が背後から迫った剣を弾き返すことに成功した。のんきな観客は鉄と鉄がぶつかり合い飛び散る火花を見た途端一層盛り上がりやがった。
こっちはそれどころではない、何せ一瞬だけだったとはいえ相手の動きを見失ってしまったのだから。今までの連中とはまるで格が違う、本物の手練れの実力に驚きを隠せない。

「・・・やるな」

ギャリギャリと細身の刀をガントレットに擦り付けていたマフラー漢の目つきが変わり、そんな一言を呟いた。同時に３人がジン達から離れると、リングの上ではハンティング・ナイブズにジン達は囲まれてしまう形になってしまった。
３人は一瞬だけチラリとアイコンタクトのような仕草を取ると、武器を構え直しそれぞれが定めた標的へ向かい襲いかかった。しかもそれはジン達にとって最悪の組み合わせであり、ジンにはあのデカブツが、マフラー男はアゲート、そして細目が虎眼へ襲い掛かる。
戦闘の主導権を完全に握られてしまったジン達は、リングの中で散り散りになり、それぞれが苦手分野の相手を敵に回して戦わされる羽目になってしまうのだった。

「くそっ！気ぃ引き締めろよてめえら！！コイツ等今までとなんか違うぞ！」
「引き締めなくたっていい、今すぐぶっ壊してやるからよ～！」

ジンに煙を吸わせる余裕も与えず、デカブツがあの大剣を上段から一直線に振り下ろし

てきた。この攻撃を受け止める術を持たないジンは横っ飛びでこれを回避し、この一瞬出来た隙をついてデカブツの右手を狙ったが、身なりに似合わぬスピードで今度は横から迫ってきた攻撃に驚愕し両手の剣で受け止めようと試みた。
しかし結果は明白、おそらくあの大剣より体重が軽いかもしれないジンはこの一撃だけでリングの外まで、まるで蠅叩きの蠅のように呆気なく吹き飛ばされてしまった。パワー階級に違いがありすぎるうえ、武器本体の攻撃力、耐久力、全てが相手の方が勝っている。固い地面に叩きつけられた衝撃で頭の中が真っ白になってしまったジンは、この戦いであれにどう対処したら良いのか分からなくなってしまい肺から逆流した空気を一杯に吐き出した。

このメンバーの中で最も悲惨な戦いを強いられているのは間違いなくアゲートだろう。相手はあのマフラー男、所有する武器は「閃刀 夜叉」と名打たれている刀身の細い片刃のこの辺りでは珍しい刀だ。
マフラー男の戦い方はジンが使う技で言うところの「交響曲」に近い、「居合抜き」と呼ばれる特殊な抜刀術だった。常にアゲートの周りをしきりに動き回り、突然駆け寄ってきたと思ったら次の瞬間涼しい鉄と風の駆け抜ける音と共に体のどこかが切裂かれてしまうのだ。
アゲートは現在病み上がりの状態、とてもあの鞘の中で加速された高速の刀身を視認することはできない。せいぜい足掻いたところで、拳骨で攻撃を少しだけ防ぐのだが、この拳骨ハンマーは本当に重く重症の肉体にこれはあまりにも不釣合いである。
相手はこれを完全に見越していたのだろう、ほぼ瀕死状態の一人を確実に潰してしまえば後の勝負は３対２、ルールに則った正式な袋叩きが完成してしまう。アゲートだってそれくらいは分かっているのか、攻撃の間に自分もやみくもになって拳骨を振り回して応戦している。
無理を言ってここまで来たのに真っ先に足手まといになっては意味がない、たとえ傷が開こうが怪我が増えようがとにかく速攻で倒されるわけにはいかない。アゲートはその意地だけを背中に背負って戦った。

一見問題なさそうに見える虎眼だが、見た目以上に苦戦を強いられていた。まだ始まって時間もわずかしか経過していないにもかかわらず、虎眼のガントレットはボロボロになってしまっている。あの細目の男の振り回す巨大なショーテル、一撃でも喰らった瞬間致命的な大怪我になりかねない危険なギミックが施されている。
その正体はあの剣の中に仕組まれている発熱機だ。どういう仕組みなのかは全く見当もつかないが、剣の内側で発熱機が常に稼働しており、刀身全体まるでフライパンのように高温に熱せられている。こんなのでもし肌を傷つけられようものなら傷口が火で炙られるような大火傷の追加攻撃で塞がりにくくなりいつまでも重傷状態をキープし続ける形となる。一撃でも喰らわないようにガントレットで攻撃を防ぐのだが、ガントレットの鋼が熱を吸収し
全体が熱せられ、さっきから焼けた砂の中に両手を突っ込んだように内側が熱くなっている。

「へぇ、すごいですね。僕達をまともに相手をして１０分も耐えられるなんて驚きまし

たよ」
「そのままその言葉を返してやる、俺達も並の修羅場を潜り抜けてきてはいないのでな・・・それより貴様らこそいったい何者だ？」
「・・・なんのことですか？」
「とぼけるな！！」

虎眼は体制を整えると一声し、足元の床石を軽く砕き細目へ向かって石つぶてを蹴りあげた。虎眼としてはあまり正当とは呼べない目くらまし技「土竜波」という技だ。相手の視界を一瞬だけ塞ぎつつ、虎眼は細目の背後に回り込みその背骨めがけて拳を振り抜いた。
しかしその瞬間にすでに虎眼の目の前にはあの細目の姿はなく、その拳は虚しくも空を切った。信じられないが、細目は自分の背後へ回った虎眼のさらに後ろへ先回りしており、狐のような細い目を半分開きショーテルを振り下ろした。
この攻撃を虎眼は回し蹴りと同じ要領で靴で受け止め、肌が焼けるような熱と痛みに耐えながらショーテルを弾き返した。靴の裏に仕込んであるトレーニング用の分厚い金属板のおかげで助かったが、防ぐことができるのはどうもこの一発だけのようだ。とっさに振り回した右足の金属板はすでに表面が溶けてしまい、足の裏がジリジリと焼かれるように熱くなる。

「武術の心得があるようですが・・・我流のようですね？どこで覚えたんですか？」
「貴様たちが降参したら教えてやる・・・」

自分が不利な立場にある中でも、虎眼はあくまでも挑発的な態度を取り「かかって来い」と手招きをする。

それぞれが独自の戦いを繰り広げる最中、その戦いぶりはすべての観客を熱狂の渦へと巻き込んでいる。そんな観客の中に二人だけ面白くない表情で３人の戦いを見つめる者がいた。言わずもだが、それはジェットとドクターだ。ジェットは眉間に深くシワを作りながらさっき空き時間中に購入してきたアイスクリームをかじった。

「んん～・・・ジンやアゲートが多少苦戦すんのはなんとなく分かっけど、虎眼が押されてるってのは妙に気に食わねえな」
「キシシ、小生もそれは同感だね。メガネ君はともかく虎君まで防戦一方なんて見たことがない」
「疲れでも溜まってうまく動けねえのかな？」
「そんな安い理由で彼らが押されるようなタマかい？」
「そりゃそうか・・・」

大柄な体躯に似つかわしくない軽快なフットワークと圧倒的なパワーでジンを圧倒するデカブツ、ケガをしたままとはいえアゲートを一切の容赦なく切りつけるマフラー、そしてあの虎眼を手こずらせるほどの力を持つ糸目・・・。
ジン達のようにただ単に強いだけではない、あの３人にはまだ何か別の強さが見え隠れしておりその力であの３人を押し切っている。その力とはなんなのか、彼らはいったい何者なのか、ドクターの頭の中にはそのいくつもの問題がぐるぐると回って思考回路と記憶配線を加熱させている。

「もしかして知らないので？」
「・・・は？」

指を顎に這わせて考えていたドクターへ、隣に座っていた男が横やりを入れてきた。男は何やら不思議そうな眼でドクターを見下ろしている。

「知らないって・・・何をだい？」
「彼らだよ彼ら、ハンティング・ナイブズのこと」
「悪いけどアタシら二人は昨日この街に着いたばかりで、この祭りのことを知ったのも昨日だ」
「旅行か何かで？」
「答える義理がどこにある・・・それで、あの連中のことを君は知っているのかい？」

「知ってるも何も、彼らはこの町では有名人さ」

男は紙コップに残っているビールを飲み干すと、上機嫌になって教えてくれた。

「ハンティング・ナイブズのメンバーは５人とも全員、元軍人なんだよ」
「軍人だぁ？どこの？」
「さぁ何だったかなあ？ナントカって軍に所属する何とやらって部隊に入ってたと聞いてたけど・・・何せもう１０年位前の話だからなあ」
「不明要素満載で何が何やら分かったもんじゃねえじゃねえか」

酒が入って頭の中がフワフワしているのか、男の説明には一番重要な部分が欠如している。おかげでジェットは訳が分からなくなりイライラしている。
しかしドクターは少し違う。記憶の糸を張り巡らせ、今出てきた全ての単語をキーワード検索し、記憶の資料の中から正解の文章を導き出そうとしていた。
・・・・・。そして今、たっぷり１分以上考えてようやくもっとも答えに近い記憶を見つけ出した。

「・・・・・思い出した」
「？」
「君、そのナントカって軍はひょっとして「レイジングブル」という名前じゃないかね？」
「ビンゴ！その通りだよ、いや～やっと思い出せたよ！ありがとありがと」

男はドクターの一言により、忘れかけていた記憶を取り戻して満面の笑みを浮かべた。そのまま実にスッキリした表情で席を立ち、新しいビールを買いにその場を離れてしまった。
出来れば正解であってほしくなかった質問がまさかのど真ん中ストライクで、ドクターは急に顔の影が濃くなりうな垂れてしまった。

「オイ、どうしたんだよ急に？」
「・・・この勝負、メガネ君たちに勝ち目が薄いかもしれない」
「はぁあ！？何言ってんだよお前」
「男女君、君は知っているかい？レイジングブルという名の軍隊が存在していたのを」
「知らね」

地方大陸出身の田舎者がこんな外国の世情に詳しいはずがなく、ジェットはそう堂々と答えた。
あらかじめその答えを見越していたドクターは分かりやすく解説してくれた。

今から１５年前、このシーバルー大陸において最強と謳われていた軍がその「レイジングブル」である。彼らの最大の武器は竜騎兵部隊、ラプチナ大陸で言うところの騎馬隊のことだがその操竜技術と圧倒的な兵力で幾多の戦争と勝ち進んできた当時最も恐れられた軍隊だった。
「だった」と過去形で呼ぶのには理由がある。現在レイジングブル軍はこのシーバルーには存在していないからだ。理由はたったひとつ、今現在国内全土に猛威を振るっているフェイファー・ツェリザカ軍によるあまりにも一方的な弾圧を受け、壊滅させられたからだ。当時のフェイファー軍はレイジングブルを上回る強い兵力と最先端の技術で兵器を開発し、手に入れ、国内の兵士を全滅させるのに半年とかからなかった。
そんな中、レイジングブルの中で生き残った部隊があると影で噂されてきた。その部隊の名は「キングコブラ」。キングコブラに所属する兵士は他の兵士とは異なり、特殊活動兵として特別な技術を身に着けていた。キングコブラは常に戦場において第２の勢力として活躍していたらしいが、フェイファー軍の攻撃を受けた後、誰一人の死体も上げられなかったが、死体未回収扱いのまま公式的に死んだことにさせられた。
そんなキングコブラの構成人数は５人。

Ｄ・イーグル／「鎌鼬」の異名を持ち戦場では目では追えない速さの太刀筋で敵を根切りにしていた男。
ジェリコ／物腰の柔らかい態度な半面、戦いになると２本の剣で敵を切り裂き全身を血にまみれされた男。
マテバ・ウニカ／刃の大きい薙刀を得意とし、接近戦においては肉弾戦も得意とした男。

グロスフス／戦場において大型の電動ノコギリを愛用していた残虐性に富んだ男。
ウッズマン／大柄の体格に小回りの利く素早い動きを両立させた曲者と呼ばれた男。

彼らの生存が確認されたのが１０年前、今はフリーの傭兵となり戦争の犬として各地を巡っていると聞いている。
フェイファー軍としてこの残党を始末しない理由はないはずなのだが、この５人は公式的に死んだ扱いとなっているので兵を動員して殺すことも、首に賞金を懸けて賞金稼ぎ共に殺させることもできないので奇跡的に放棄させられたのだった。死人がもしフェイファー軍に被害を及ぼすような行動に出た場合のみを除き、フェイファー側も何も手を出さないことを約束してくれた。
そしてある年、このウェポン・フェスティバルにたまたま参加してたまたま優勝したのをいいことに、この祭りの常連となったのだった。
それを聞かされたジェットの顔は、血の気は引いたかのように白くなり、目を剥いた。

「おい・・・それってひょっとして？」
「彼らは今まで相手にしてきたチンピラとは格が違う、訓練された特殊鋭兵部隊。効率的な人の殺し方はメガネ君や虎君よりもよく知っているだろうね」

５人全員の実力が虎眼クラス、加えて人殺しの英才教育を受けたエキスパート集団ときたもんだ。ドクターが言った「勝ち目が薄い」とはこのことだ。
あの３人は始めに手合わせをした時からジン達の特徴を探り、その上で最も効率的に始末できる相手をそれぞれ選びまるで狩りをするように確実に仕留める気なのだ。
確かにこのままではジン達がまけてしまう可能性の方が高い、ここからどうやって巻き返すのかジェットも不安になり冷や汗を流しながら、ただただじっとあの試合を見守ることしかできなかった。
そしてそれはドクター達だけではなく、武器を提供したヴァジュラの一家３人も同じ心境だった。自分たちが作った武器よりも、むしろそれを使ってくれているジン達の方が心配でならない様子だ。
ひたすら静観するグロックの隣では居ても立ってもいられずに大声を出して応援するエンフィードと、両手を組み合わせ目を閉じて、せめて無事であってほしいとベレッタが祈っている。
もはやジン達が勝つために必要なのは「奇跡」を待つくらいしか方法が見つからなくなってしまった。

リングの上ではまだ６人が文字通り激しく火花を散らしていた。
タバコも吐き捨て頭の中が少し落ち着いてきたジンは時折攻撃のチャンスを見つけては攻め入るのだが、このデカブツの・・・ウッズマンのスピードと武器の覆しがたいリーチの差が邪魔となり決定的な一撃はいまだ０。それどころかジンの剣が攻撃を防ぐたびに傷つき刃が激しく毀れてしまう有様だ。
アゲートも何とかしようと懸命に相手の・・・イーグルの動きを追おうと努力はするもののボロボロの体が軋みいうことを聞かず、結果動こうとした分だけイーグルにとって実に斬り捨てやすい的と化してしまっている。
虎眼もそろそろ限界が近い、思い切って拳を振り抜き細目の・・・ジェリコのショーテルを破壊しようと幾度となく挑んだが先に悲鳴を上げるのは必ずガントレットの方であり熱された鋼はついに溶け出して火傷した素肌がチラチラと覗いている。
残された体力も底が見えてきている、戦いの最中ジンはイラ立っていた。
この試合で負けてしまうことよりも、大見得切って優勝してグングニエルの出鼻をへ

し折ってやるとあの家族に約束したのに、自分がこんな体たらくなのが一番腹立たしいのだ。完全に甘く見ていた、軽く見すぎていたのがすべての敗因でしかない。口の中で歯がギリッと軋むのを聞きながら自分の慢心を自ら呪った。
ジンはウッズマンと距離を離しリングの隅ギリギリまで後退すると、両腕を抱き込むように交差させた。通用するかどうかわからないが、一か八か「序曲」を放つことに賭けた。観客や近くにいる虎眼たちにも迷惑をかけるかもしれないがここまで逆境に立たされたら何も気にする必要などないと判断したのだ。都合よくウッズマンも正面から迫ってきている、間合いに入った瞬間、竜巻で飲み込んでやると意気込んだ。

だがその直前、全てがぶち壊れた

「いらっしゃいませえええええええええええええ！！！！」

スタジアムの中にあるすべてのスピーカーから、突如とんでもない声量の声が轟いた。ハウリングも発生しあの耳障りなキーンとした音も響き観客の声援も、そしてリングの上で戦っていた全員の動きもストップしてしまうくらいだった。

「毎度ご利用、ありがとうございますううううう！！！！」

再び同じ声がスピーカーから飛び出し、突然訳の分からないことをしゃべりだした。緊張の糸が完全に途切れてしまったジンはさっきまでとは別種の怒りを覚え周囲を見回した。
こんな下らない悪戯を決行して人の真剣勝負に水を刺したのはだれか、ジン意外にもリングに立っている全員が、そして全ての観客とドクターにジェット、そしてあの一家も辺りをキョロキョロと見回している。

「あああっ！！？」

どこかの観客の一人が大声を上げて空を指さした。それに釣られる様に近くにいる観客を始め、波紋が広がるように皆が空を見上げた。リングに立っている６人も空を見上げると、ジン達の目に何かが見えた。
何かが空を羽ばたいている。デカイ・・・太陽の光を手で遮りながらよく観察すると、それはこのスタジアムの上空をグルグルと旋回している。
あの形は・・・・ドラゴン？んにしては何か妙な気が・・・。
そしてそれは唐突に旋回をやめると、スタジアムへ鼻先を向けて急降下してきたのだった。観客たちは悲鳴を上げてスタジアムから逃げ出し、リングに立っている選手も全

員一目散にその場を離れた。
そしてそれは、リングの上に舞い降りた。

ズシイイイイイイイインッ！！！

凄まじい地鳴りと地震がスタジアム全体を揺さぶり、床や壁のあちこちがひび割れ、破片が飛び散った。予想以上の衝撃で蹴っ躓いてしまったジン達がゆっくりと起き上がり、意識をはっきりさせたうえでようやく問題の震源地を覗くと、破壊されたリングの上には異形の物体が会場を陣取っていた。
そこにいたのは・・・全身を鉄の鎧で包み込んだドラゴンの姿だった。いや、正確に言えばあれはドラゴンではないのかもしれない。体表の鉄の鎧には継ぎ目が見え、わずかな隙間には機械が見え隠れしている。目玉は発行しているし、角や爪、翼や体の関節には明らかに人工物らしきネジやボルトが覗いている。
言ってみれば、あれはドラゴンの形をした機械なのだ。

「いい！？何さあれ！？」
「俺が知るか・・・」
「・・・嫌な予感しかしないのは俺だけかな？」

いっそのこと気分を入れ替えて、新しいタバコを咥え直しながらジンは呟いた。そしてこういった感じの勘は、いつものことながら大抵当たるのがお約束というやつだ。

「グングニエルの、訪問販売でございまああああああああすううう！！！」

あのドラゴンの口の奥にはスピーカーでも内蔵しているのだろうか、まるでドラゴンが吠えるように大口を開けた途端、またあの耳障りな声が響き渡り鼓膜を激しく振動させてきた。
そしてまた厄介なのがこの直後・・・ジンは嫌なことを思い出してしまい少しだけ青ざめた。

「・・・虎眼、余計なこと思い出してしまった」
「あの声のことか？」
「ご明察」
「へ？何の話？」
「思い出さねえか、あの声を聞いてよう？」
「声？」

まだ話についていけないアゲートが首をかしげ、言われた通りに今聞こえたあのうるさい声をヒントに、過去に自分が出会った人物を必死に検索し始めた。

・・・・・・・・（ポクポクポクポクポクポク）。考え中

「・・・・・あっ！！」（チーン！）
「思い出したか？」
「あん時のグングニエルの！」
「ビンゴだ、花丸くれてやる」

そう、あのスピーカーの中で拡張されたやかましい声の持ち主は、あの忌々しいグングニエルの社長の、スチェッキンの声だった。とすればだ・・・ここにあの野郎があんな

大荷物の中にいるとして、あんな訳の分からない物持ってきた理由なんかタカが知れている。どうせ同じ理由だろ？

「クソメガネとクソロン毛えええええ！！！！ぶっ殺してやるうううううううぁぁあああああああ！！！」

やっぱりか。またあの野郎が懲りずに逆恨みに来やがった。しかし不思議なのはあのスチェッキンの方だ、あの時倉庫の中でトドメに虎眼の蹴りを背中に食らい背骨をへし折ったはずだが、なんでまだ生きてんだ？どんなにまともな状態だってせいぜい今頃ベッドの上で絶対安静のはずなのに。悪けりゃ背骨ヤったんだから下半身不随みたいな重度の障害だって見込めるはずなのに・・・なんでアイツは平気なんだ？

「メガネ君！ここにいたかい」
「見つけた見つけた！」

そこへいいタイミングで、ドクターとジェットが走ってこちらへやってきた。観客達に混じって逃げずにこの危険度一等地にわざわざ足を運んでくれるのがこいつ等らしい限りだ。

「逃げなかったのか？」
「キシシシ、ちょっとあれが気になってね」
「丁度良いんだけどよドクター、半年はベッドの上で生活しなきゃいけないケガをした野郎がいたとして、その野郎が怪我した即日に外を走り回るにはどうしたらいいんだ？」
「・・・ナゾナゾかい？」
「あれに乗ってる野郎がそれなんだよ」

そういってジンは煙を吐き出し、あのドラゴンを顎でしゃくした。ドラゴンは一体何がしたいのか、訳も分からずさっきから無茶苦茶に腕や翼を振り回し、この広いリングの上から観客席を壊して回っている。同時にスチェッキンも訳も分からず奇声を発している。ハッキリ言って相当ヤバイ。

「んんん・・・ヤクだろうねぇやっぱり」
「？」
「医療機関の間では麻酔やら鎮静剤やらの中に微量の麻薬を混入させ、薬の効果を高めているというのが昔から存在している。ただし用法、用量を守った正しい量だからできる技術であり、量を間違えた途端薬は一瞬で毒に早変わりだ」
「つまり、あの野郎はその類と？」
「小生の見解ではもっとタチが悪いと見た。おそらく彼は、麻薬の原液を直接大量に注射し、同時に複数種類やってるだろうね」

痛みを即座に和らげてくれるモルヒネなんかが有名なところだろう。
スチェッキンはおそらくその手の類の薬を大量に投薬、アヘンやコカイン、マリファナなど俗にいう「アップ系」のハードドラッグを服用することにより痛みを完全に消し去ることに成功し、激しい興奮状態のままここまで来た可能性があるとドクターは推測

する。
だがもしもドクターが言ったとおり、今言った全てのドラッグを服用したのであれば、もう彼は人間ではいられなくなる可能性が高い。その手の薬には激しい中毒性と依存性があるのは知っての通り、一度手を出せば二度と人間社会に戻ることはできなくなる。あぁ怖い怖い。
いっそのこと潔く、安らかに殺してやった方が世の為人の為、そしてスチェッキンの為という物だろうとドクターは語り、他人事のように合掌した。しかしそれにはジンも大賛成なのは事実。同じように合掌した。自業自得、諸行無常、南無阿弥陀仏ナンマイダ。

「ちょっと待て、その話は本当なのか！？」

脇から人の話に首を突っ込んできたのはハンティング・ナイブズのメンツだった。どうやら今の話を横で聞き、驚愕したような顔をしている。さっきの騒動に巻き込まれたのか、マテバの額からは一筋の血が流れていた。

「あのドラゴンの機械に乗っているのがグングニエルの社長で、おまけに麻薬を摂っているというのは！？」
「キシシシ・・・薬に関しては小生の妄想だが、可能性は決して低くないと思っている」
「お宅らの愛用している獲物の販売、製造元の会社はよう、一枚薄皮めくればあんな糞の塊が社長やってんだ。おまけに店舗拡大と手前の腹ん中満たすために相当黒い埃をたっぷり被ってきてるぞ」
「そんな、バカな・・・」

長年使い続けてきた武器を売ってくれた店がそんな黒い裏事情があったことを知らなかったイーグルは、ショックを隠し切れずその場で両膝をついてしまった。

「要するに、自分の中に眠ってた汚ねえ欲望がある日突然爆発して、今のアイツを作ったってとこかな？」
「そんなところだろうな。あの男はその欲望の為ならば平気で人も殺している、自分の手を決して汚さない最悪の方法でだ」

ジェットと虎眼のセリフが最後のトドメとなり、ジェリコをはじめとした５人全員が一瞬にして青ざめ、手に持っている武器を落とした。そして自分たちが今置かれている状況をしっかりと把握し再び絶望する。自分たちが今までこの祭りでしてきたことはグングニエルの宣伝であり、その効果でグングニエルは今まで巨万の富を手にしてきていた。事情を知らなかったなど言い訳にもならない、自分たちがやったことはグングニエルへの加担、そして人殺しの片棒を担いだのにも匹敵する重大な罪だったのだ。
全員涙も流れず、ただただ愕然としかできなくなってしまった。

「・・・・こっから先はオレ達の仕事だな」
「・・・え？」

「オレっち達はさ、この祭りで優勝するのが目的じゃないさ」
「そうだな。俺達はこの祭りに参加しているグングニエルの武器を破壊し、ついてはあの男の天狗の鼻を根元からへし折るために来たんだ」
「キシシシシ・・・君たちがここにいるのは邪魔だ、観客の避難誘導でもしながらここから逃げたまえ」
「なぁにあんなポンコツドラゴン、アタシらにかかれば余裕よ余裕！」

途中から目の前の５人が何を言っているのかわからなくなり、キョトンとした連中を放りジン達はゆっくりと歩きだした。今日の獲物は鉄製のドラゴン、相手にとって不足無し。
虎眼はボロボロになったガントレットを捨て代わりにドクターからもらったバンテージを拳に巻きつけ、アゲートは体を縛っていたほとんどの包帯を外しバンダナを整え、ジンは新しいタバコに火をつけ着ているコートを着直した。ジェットとドクターもそれぞれの準備を整え、そして全員が一様に危険な笑みを浮かべている。

「あの・・・何をする気で？」
「決まってんだろ？・・・・あのドラゴンを、狩る！」

剣がちょいとボロボロだろうが関係ねえ、今からやるのはいつもと変わらない食料調達と同じことだ。たとえ体が鉄だろうが鱗だろうが知ったことじゃない、今日もあのドラゴンを狩って捌いて焼いて喰うだけだ。

・・・あれからすっかり夜が明けた翌日、あのスタジアムには多くの工事関係者の人間でごった返していた
。騒ぎの中心となったあの例の鉄製ドラゴンは現在、ただのスクラップ廃材と化して業者の手によりバラバラに分解され、使えそうな部品の仕分け作業の真っ最中だった。
何せ損壊が激しく、黒焦げになった電気系統はほとんど使い物にはならずまともに残されたのは表面の板金程度しかなかったわけだが・・・。
ロボットドラゴンとあの化け物５人の戦いは激戦を極め、戦いの詳細を知っている人間は戦った本人たち以外誰もいない。刃の欠けた剣で鉄の鎧を切り裂いたり、炎で全身をコンガリ炙られたり、途中でハンティング・ナイブズのメンバーがドラゴン狩りに参戦したり、トドメがまさか人間の拳でドテっ腹に風穴が開けられたり等、誰も知る由はない。
分かっていることは二つだけ、一つは今年のウェポン・フェスティバルは前代未聞の優勝者無しという形で閉幕したこと。決勝戦の最中にとんでもない妨害が入り会場は
破壊、観客とレフリーも不在、どちらが勝ったのか判定する人間もいないので試合はノージャッジ、無効試合となったのは仕方ないことなのだろう。
もう一つは、この日を境に大陸全土に展開している武器屋「グングニエル」が軍隊の手により捜査のメスが入れられ店側が隠し続けてきた「裏の顔」を表面に暴露されたこと
。
グングニエルは全店舗即日半永久的営業停止処分の他従業員も一人残らず一斉検挙、全員今頃取り調べを受けるために行列を作っているころだろう。ただ一人だけ例外なのがグングニエルの社長スチェッキン、彼だけが事件後行方不明となり軍が行方を捜査して回っている。

所変わり、ここはウェポン・ストリートの武器屋「ヴァジュラ」の店内。今ジンの手に今まで愛用し続けてきたバスタードソードが手渡された。鞘から抜き取ると、刀身は鏡のように磨き上げられ美しく光を反射し輝いてくれている。刃も研ぎ直され本来の切れ味を取り戻している。

「・・・パーフェクトだ、爺さん」
「感謝の極みでございます」

想像以上の出来栄えにジンは嬉々とし、グロックの爺さんもうれしそうに頭を下げてく

れた。猫眼の方も問題なさそうで、愛用の手袋を両手にはめご満悦だった。

「今度はもう剥がれない様に、拳のベアリングの代わりにビスを打ち込んでおきましたぁ。もう壊れる心配はないかと思いますぅ」
「問題なし！謝謝ネ！」
「でも不思議ですねぇ、あなた本当にあのすっごく強かった男の人なんですかぁ？」
「よく言われるけど間違いなく私が虎眼であり、今は猫眼ヨ」

二人は女同士、満面の笑みで笑いあった。そして最後にエンフィードの手から直接、アゲートへ鍛え上げられた斧が返された。

「はいよお待ちどうさん、完璧に仕上げさせてもらったぜ」
「見違えるようさ～！あぁ、でも・・・」

アゲートは急に表情を曇らせ、目の前の斧を受け取るのにためらいを見せた。本当に受け取るべきなのかどうなのやら、といった顔をし腕を伸ばしたり引っ込めたりを繰り返している。何を意図しているのかよくわからないエンフィードに代わり、後ろに立っていたドクターが代返してくれた。

「キシシシシ、どうやらバンダナ君はこのクレセントアックスよりも、あの巨大な拳骨の方がお気に召してしまったようだね？」
「ドキッ！！」
「・・・そうなんで？」
「いやまぁ、正直に言うとさ。なんとなく惹かれっちまうようなものがあってさ、何かあのハンマーがその・・・忘れられんくてさ」
「・・・ダチとの友情の証ってか？」
「ぶっちゃけ、そんなところさ」

アゲートはジェットからの援護射撃によりキッパリと吹っ切り、潔く自分の心境を打ち明けた。ただ今まで愛用し続けてきた斧よりも、ライバルとして、そして今ではすっかりダチとして譲り受けたこのハンマーの方がよっぽど思い入れが強いようなのだ。アゲートは気恥ずかしそうに顔を朱に染めながら頭をかき、申し訳なさそうに笑った。
でもエンフィードは別に怒るようなことなどなく、アゲートの表情を見た途端何だか気

が抜けてしまい斧を自分の方に担いだ。

「武器って物には思い入れってのも大切だよな。俺の仕事ぶりが無駄になったみたいでちょっと悔しいけどな」
「えっ！いやそんな意味では・・・」
「冗談だよ。せいぜいそのハンマーをさ、せっかくなんだから一人前にしてやんなよ」
「任せるっさ！！」

武器屋と使用者の両者が笑い、お互いが誓い合うように拳を力強くぶつけた。

これですべての目的は達成され、とうとうこの町ともおさらばする時が来たようだ。順番に店の小さい扉から皆が出てゆき、最後のジンが後ろ手を振りながら出て行こうとした時、ベレッタがポツンと声をかけた。

「そういえば、あれからスチェッキンさんが行方不明と報道されてましたが、ひょっとしてどこへ行ったか知ってますかぁ？」
「・・・・さぁな。ここは砂漠なんだし、今頃太陽の下で日焼けでもしてんじゃねえの？」

それだけ言い残し、ジンは振り返りもせずに店を出て行った。

最後に残された謎・・・スチェッキンの行方。これはさっきはとぼけていたが犯人はやはりジン達５人だった。
ロボットドラゴン破壊後、急いで逃げようとしていたスチェッキンを虎眼が拘束、ドクターが縄で縛りあげて絶対に逃げられない用に捕縛した。
この男の処置はどうしたらよいか数分ほど会議した結果、ジェリコ、イーグル、ジン、ドクターの意見を一つにまとめた最大の苦痛を伴う地獄のような処置、「砂漠のど真ん中で磔にしてドラゴンの餌」の刑で手を打った。
軍隊が集まる前に会場を抜け出し、グレネドの外へ駐車していた車で砂漠の向こうまでダッシュ、スチェッキンを５ｍある十字架の先端に張り付けて地面に固定、ついでに途中で仕入れたごま油と焼き肉のタレをスチェッキンにぶっかけ、十字架の周辺に肉屋でもらった賞味期限が切れた廃棄の肉をテキトーにバラ撒き、腹を空かせたドラゴンが集まりやすい環境に整えて、あとはひたすら放置。
間違っても泣き叫んで誰かが助けに来たりしないように口にはガムテープを貼り、呻き声も出せないように仕上げれば全て完璧だ。

きっと今頃、惨い姿になっていることだろう。いや逆だ、骨も残らないかもしれない。文字通り、骨なんか拾わないし念仏も唱えてなんかやらない。

続く

おまけ

武器　スレッジハンマー
所有者　アゲート
全長　１５０ｃｍ
重量　１３０ｋｇ
説明　和名は「鎚」、木製になると「槌」となる物を打ちついたり潰したりするための工具。柄を持って重い頭部を振りぬき、慣性の法則で対象を叩き潰すのに適した打撃系の中では有名な武器。もともとは武器屋「バハムート」の商品であり、ぶっ壊れてしまった斧の代わりにもらった友情の証。頭部の素材は鋼を超える強度を持つ超金属「ミスリル」を採用、しかし比重が鉛より重いためこんな超重量となり店に置いても誰も買ってくれない失敗作だったらしい。

おまけ２

シーバルーで登場する人物は全て銃器の名前で統一

グロック→Glock 17
ベレッタ→ベレッタＭ９２Ｆ
エンフィード→Enfield Revolver
スチェッキン→スチェッキン・マシンピストル
Ｄ・イーグル→Desert Eagle
ジェリコ→ジェリコ９４１
マテバ・ウニカ→マテバ ６ Unica
グロスクス→グロスクスＭＧ４２機関銃
ウッズマン→Colt Woodsman